

誰が、ラストシーンを観たか

安藤 紘平

Kohei ANDO

■ スクリーンからの距離

「僕の場合、スクリーンからの距離ではなくて、スクリーンまでの距離が問題なんだよね。スクリーンまで、何マイルか……。」

1974年だったと思う。寺山さんは、東京都美術館のオープン記念展で上映された私の作品『The Distance From the Screen-スクリーンからの距離』を見て、こんなことを言った。

「つまり、映画を観ているうちに観客とスクリーンの距離がだんだん縮まって行って、映画が終わるころには、皆、スクリーンの中に写し撮られてしまい、客席には誰もいない……。ラストシーンは、全員がスクリーンの中にいるから、映画の最後がどうなったか見ている人は誰もいないんだ……。」

私が映画を撮るようになったのは、もとはと言えば、寺山修司さんとの出会いから始まったことである。早稲田大学在学中、先輩に寺山さんの義理の弟がいて、ひよんな切っ掛けで寺山修司の演劇実験室“天井桟敷”に入団した。

1969年、天井桟敷がフランクフルトの実験演劇祭に招待された時、私もまた、劇団員として参加していた。演題は、『毛皮のマリー』と『犬神』で、大変な人気を集めたものである。

大成功の後、パリへ向かう機中で寺山さんはこう話しかけた。「安藤さん、これからは映画の時代だよ。パリで、割り勘で中古のカメラを買おうよ。一緒に映画を撮ろうよ。」これは、寺山さんのみえみえの陰謀である



寺山修司

ことがすぐに分かった。我々の飛行機代の半分はパンナム航空とのタイアップであり、条件として、パリのパンナムビル前で、当時人気のタイガースの加橋かつみと寺山さんが対談して、その映像をテレビで流すことだったが、現地カメラマンや機材借用費が馬鹿高

くて、プロデュースしていた九條映子（現 今日子）さんと私は、ずっと頭を悩ましていたのである。私は、すぐに寺山さんの誘いに乗って、パリに着くや中古の16ミリカメラを購入、なんとか無事、タイアップ映像を撮り終えた。しかし、帰国後、いつまで経っても寺山さんからは共同映画製作の話がこない。やむなくそのカメラで撮影した『オー・マイ・マザー』が、ドイツのオーバーハウゼン国際短編映画祭で入選したことから、私の映像作家としての第一歩が踏み出されたのである。



『オー・マイ・マザー』1969

- ・1969年オーバーハウゼン国際短編映画祭 入選
- ・アメリカ、ロスアンジェルス Getty Museum 収蔵
- ・横浜美術館 収蔵
- ・バリ Light Cone 収蔵

その後、萩原朔美君（現多摩美術大学映像演劇学部長）や榎本了壺君（現京都造形芸術工科大学教授）らと私は天井桟敷を退団、映像制作集団“ファミリーフィルムメイカー”を立ち上げた。これが後に、雑誌「ビックリハウス」の出版母体となるのだが、そこを起点に、私たちは実験映画を撮り始めた。幸運にも、作った作品が次々国際映画祭で受賞、CMや中島みゆき、オフコースなどのミュージックフィルムを頼まれるようになって、いつの間にか映像作家と呼ばれるようになった。

■ 映画は大学で教えられるか？

「安藤君、もうそろそろ早稲田大学に恩返ししませんか？」

早稲田大学の先輩で、恩師寺山修司さんの兄貴分、映画監督としても大々先輩に当たる篠田正浩監督から「早稲田で教えますか？」と、声をかけられたのは、2002年のことであった。その頃、私はTBSで、当時最先端のハイビジョン映像での演出の仕事をして



篠田正浩監督

いた。前衛映画から、コマーシャル、ミュージックビデオ、そして、テレビ番組まで何でも屋であると云うことばかりではなく、大学時代の専攻が、理工学部の電気通信学科であったことが、篠

田監督が私に目をつけた重要なポイントであった。

「今日の映像表現の現場では、デジタル技術は不可欠な道具となっています。デジタルを知らずして、これからの映画は語れません。早稲田大学では、最先端技術を駆使した映画・映像の拠点として、本庄キャンパス内に『NICT本庄情報通信研究開発支援センター』を設立しました。僕は、ここを利用して『スパイ・ゾルゲ』を制作します。君も早稲田の映画人材教育のために一肌脱いでもらえませんか？」

篠田監督からの要請は、私にとっては、まさに断ることの出来ない神の言葉、所謂“命令”と同じであった。私は、2003年から客員教授、2004年から専任教授として、早稲田大学で映画を教えることとなった。

昔、映画人たちは、決して映画の専門教育を受けていたわけではなく、映画会社の撮影所の現場でもっばら鍛えられ育てられてきた。撮影所という場所は、映画を製作する工場であったばかりではなく、新しいアイデア、手法を編み出す研究所であり、若い才能を育む学校でもあったわけである。ところが、テレビ、そしてネットなど時代の趨勢とともに、嘗ての華やかな映画産業は衰退し、撮影所というシステムは徐々に崩壊、いまやほとんど以前のように機能していない。では次の時代のために一体どこが映画人を育てるのか、今のままで映画業界は良いのか……。

そこで登場するのが大学である。私が卒業した早稲田大学というのは、映画人を多数輩出している学校として日本でも随一の存在である。名匠といわれる監督には、小林正樹、今村昌平、篠田正浩、小栗康平、是枝裕和……、そして、吉田大八や西川美和などの若手と枚挙にいとまが無い。さらに脚本家となると早稲田人の割合はもっと高い。

では、どのように大学の場で映画を教えたらいいか。特に肝心の“何を表現するか？”について、本当に大学で教えられるのか？

全米最高の映像教育機関と云われ、ジョージ・ルーカスなど著名映画人を輩出する南カリフォルニア大学の映画芸術学部長デイリー氏を早稲田大学GITIのシンポジウムにお呼びしたことがある。

テーマは、ずばり『映画は、大学で教えられるか』デイリー氏は言う。

「大学は、文学を教え、政治を教え、経済を教え、音楽を教え……にもかかわらず、それらの総合芸術であり、若者にとっては今一番ビビッドとしたメディアである映像を教えられなくして、何が大学たるか」

そして、

「プロを育てるには、プロフェッショナルでなければならぬ」と断言し、「産業の力を利用せよ」と。

南カリフォルニア大学
映画芸術学部長
エリザベス・デイリー氏

早稲田の映像人材育成への道

早稲田大学では、教育分野においては、産業界のプロの方々と連携して「マスターズ・オブ・シネマ」や「プロデューサー特論」等といった画期的な授業を開講した。



『マスターズオブシネマ』での是枝裕和監督と筆者



『マスターズオブシネマ』での山田洋次監督

映画界を支えるプロフェッショナルなゲストを迎えて、何故映画にかかわったか、どう映画に取り組むべきか、具体的な映画の分析・企画・手法・エピソードなどから哲学・人生観に至るまで、学生たちの人間力を育み、イマジネーション力を高め、映画により興味と愛情を持ってもらう講座である。山

田洋次監督、久石譲さん、篠田正浩監督、大林宣彦監督、橋本忍さん、是枝裕和監督、谷川俊太郎さんなどのクリエイターから、フジテレビ亀山千広さん、ジブリの鈴木プロデューサー、ポケモンの久保プロデューサーなど毎週の講師はまさにプロ中のプロである。



『マスターズオブシネマ』での久石譲音楽監督と筆者



『撮影表現論』での高間賢治撮影監督と学生たち



『映画監督と学ぶ映像表現』での犬童一心監督と学生たち 成城 東宝スタジオにて

研究分野では、本庄キャンパスの『NICT本庄情報通信研究開発支援センター』を『早稲田大学 芸術科学センター』と改め、最先端のデジタル合成機器を設置した。

今日、好む好まざるに関わらず、映画はデジタル抜きでは語れない。近未来SFXやパニック映画、怪獣ものばかりではなく、昭和の風景、実写の雨や雪、青空や雲を足したり、電柱や撮影時に写り込んだ余計なものを消すなど、日常的にデジタル技術は必要とされている。そこで早稲田大学では、最先端技術を駆使した映画・映像の拠点として、本庄キャンパス内に『早稲田大学 芸術科学センター』を設立した。ここには、最先端のデジタル合成機器が設置されている。産業界と連携し、実際の映画製作現場を誘致して新しい映像

手法について共同研究するとともに、インターンとして学生たちを現場に参加させ、デジタルの最先端を学ばせた。『日本沈没』や『隠し砦の三悪人』、『マジックアワー』、『私は貝になりたい』など、産学連携なくしてはできない実学としての研究と教育を実施している。他に、樋口真嗣監督や特撮研究所の尾上氏、ピクチャーエレメントの大屋氏などの協力で、「特殊映像合成理論」という集中カリキュラムも編成した。これによって、新しいデジタル映像技術の開発と、若い人材に対する教育が実施された。

日本がハリウッドに対抗したいというとき、日本のデジタルの合成費用は、ハリウッドに比べ50分の1くらいでしかない。日本のクリエイターは、腕では決して負けていないが、バジェットが違いすぎる。そこで、撮影所、現像所、ポストプロダクション、CG制作会社などの設備、技術、労力をネットワークによって有機的に結び付け、コスト、時間を低減しながら、最先端デジタル技術を駆使した映像制作ができる日本独特の制作システムを構築しようと考えた。それが『ネットワークを利用した先端映像統合制作事業』（高度化推進・社会連携研究プロジェクト）である。東宝、早稲田大学を中心に、イマジカ、東京現像所、オムニバスジャパン、ピクチャーエレメント、エムソフトなど大小様々な会社が持つ特徴を最大限に生かして、日本独特の日本流デジタルシネマ制作手法を開発するいわば「映像産業革命」である。

映画『ローレライ』でのミニチュア撮影
本庄『早稲田大学 芸術科学センター』にて映画『私は貝になりたい』でのミニチュア撮影
本庄『早稲田大学 芸術科学センター』にて

例えば、映画『太平洋の奇跡』では、タイの奥地から成城の東宝スタジオに映像を送った。映画『のぼうの城』では、北海道で撮影された映像データがその日のうちに早稲田本庄の芸術科学センターに送られ、そこで、CGスタジオから送られた画像とすぐさま合成され、現場にフィードバックした。そこに、日本の得意技であるミニチュア技術などの職人技やアナログ的工夫、発想を加えて、最先端機材と組み合わせ、ハリウッドで20億円かけるところを、1億円で世界レベルの作品を作ることを試みる。日本の映画産業が互いに連携し、限られたソースを有効に活用して、黒澤、溝口、小津を生んだ日本映画文化の底力を再び世界に発信したいと思った。

2012年には、本庄から成城の東宝スタジオへ『早稲田大学 芸術科学センター』を移転、大学の最先端映像の研究拠点が撮影所内に設置されると云う画期的なことが実現された。そこでは、『宇宙兄弟』『鍵泥棒のメソッド』『悪の教典』『エヴァンゲリオン』『巨神兵東京に現る』などの作品が、産学連携の共同研究のもと制作されている。



映画『巨神兵東京に現る』撮影演出中の樋口真嗣監督
本庄『早稲田大学 芸術科学センター』にて

学生たちの研究活動も盛んに行われた。

山田洋次監督や犬童一心監督、行定勲監督、樋口真嗣監督、庵野秀明監督などの現場で学び、自作の映像制作に励んだ。

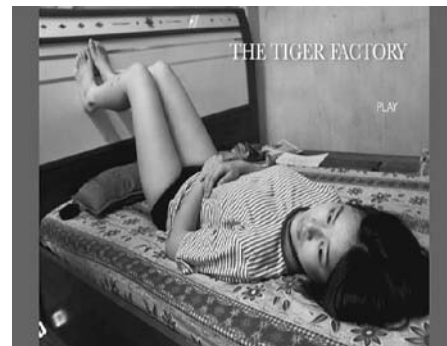
マレーシアからの留学生、エドモンド・楊や、中国の滕飛、李シカン、台湾の何文薫、タイのパフラク・コン、日本の松村真吾など、ベネチア国際映画祭、カンヌ国際映画祭、トロント国際映画祭、プサン国際映画祭、プチョン国際映画祭、上海国際映画祭、夕張国際ファンタスティック映画祭、映文連アワードなど、内外の映画祭で評価された。



『KINGYO』エドモンド・楊
ヴェネチア国際映画祭他



『瞳』滕飛
Longan International Film Festival
[Best Student Award]
フジテレビ学生映画祭



『The Tiger Factory』エドモンド・楊
カンヌ国際映画祭監督週間
東京国際映画祭 他



『EXHALATION』エドモンド・楊
Malacca Malaysia Chinese Movie Festival
Yxine Film Festival 他



『冬の断片』エドモンド・楊
札幌国際映画祭 観光庁長官賞
奈良国際映画祭



映画『TAKAO DANCER』何文薫 黄宇哲
トロント国際映画祭ワークショップ奨励賞
東京国際映画祭「World Focus」正式招待



映画『ロマンス・ロード』松村真吾
川口国際デジタルシネマ映画祭「スキップシティアワード」受賞
釜山国際映画祭 正式招待



映画『KINGYO』
2009年ヴェネチア国際映画祭招待にて
エドモンド・楊と出演者、学生スタッフ

誰が、ラストシーンを観たか？

2013年5月、寺山修司さんの母校早稲田大学の大隈講堂で、没30周年記念イベントが催された。映画の上映と寺山さんと同期生で脚本家の山田太一さんらのティーチインが開催され、大隈講堂には、800人もの学生たちが参加した。

映画『ローラ』(1974年)では、主演の森崎偏陸さんがこの映画が制作された40年前とそっくりりに、スクリーンの中に飛び込んでゆく。「映画が終わるころには、皆、スクリーンの中に写し撮られてしまい……」寺山さんの声が聞こえてくるようだ。森崎偏陸は、40年前の衣装を着て、毎年、オランダやドイツなどの国際映画祭にこのフィルムとともに招待されては、同じことを演じている。しかし、毎年、彼は確実に歳をとり、今では、スクリーンに飛び込むと同時に、四十歳も若返って、1974年当時の彼を演じている。そういう意味では、彼の一生は寺山さんの映画のスクリーンの中で生きているのだ。

「スクリーンまでの距離が問題なんです。観客がスクリーンの中に写し撮られて、終わりには、全員がスクリーンの中にいる……。」

それが、寺山さんの言葉だった。

ところで、私は来年の3月で早稲田大学を定年退官する。これまで築いてきた映画・映像の教育システムを誰が引き継いでくれるのか、どのように存続するのか、未だ明確ではない。

会場に詰めかけた学生たちにとって、いや、彼らばかりでなく、早稲田で映画を学び、研究しようとしている学生たち全員にとって、映画は、いったい何なのだろう。彼らとスクリーンまでの距離はどのくらいなのだろう。

「つまり、映画を観ているうちに観客とスクリーンの距離がだんだん縮まっていて、映画が終わるころには、皆、スクリーンの中に写し撮られてしまい、客席には誰もいない……。ラストシーンは、全員がスクリーンの中にいるから、映画の最後がどうなったか見ている人は誰もいないんだ……。」

そう、スクリーンの中に入り込んでしまったのは、寺山さんではなくて、私たち自身なのだ。寺山さんの仕掛けた映画の迷宮の中で彷徨っているのは、学生たちそして私。それを、スクリーンの向こう側の観客席で、寺山さんだけが笑いながら見ている。そういえば、私たちの誰だって、早稲田大学が完成させるべき映画のラストシーンを観た人はいない。永遠に続く映画の中で、私たちはいつまでこの役を演じ続けることになるのだろう。

誰が、ラストシーンを観たか？